

A 病院看護職員の臨床能力に影響する要因

—臨床能力と自己研鑽, ストレス対処行動・能力に着目して—

和泉美枝, 小松光代, 植松紗代, 神澤暁子, 西村布佐子, 大澤智美,
中村尚美, 倉ヶ市絵美佳, 橋元春美, 眞鍋えみ子
京都府立医科大学

【目的】看護師の臨床能力育成と向上への取り組みの一環として, A 病院看護職員の臨床能力を H21 年度から検討している. その結果, 臨床能力や組織内役割遂行能力に比べ自己研鑽能力が低かった. 本報では H22 年度に実施した調査から臨床能力と自己研鑽, ストレス対処行動・能力に着目しその関連を明らかにする.

【方法】全看護職員 605 名を対象に師長からアンケート用紙を配布, 回収箱投函にて回収した. 倫理的配慮は依頼文に研究趣旨と個人情報保護に関する内容を記載, 調査と結果公表の同意を書面で確認した. 調査内容は 1) 属性, 2) 臨床能力: 教育ニードアセスメントツール(三浦ら, 教育ニード; 社会性提示と職業活動, 目標達成と責務, 複数役割遂行, 独創的発想と目標達成, 知識・技術活用と人権配慮, 組織発展への貢献, 自己研鑽から構成 4 件法), 看護実践の卓越性自己評価尺度(上田ら, 卓越性 7 下位尺度 5 件法), 職業的アイデンティティ尺度(PISN) 5 件法, 3) ストレス対処行動; カタルシス, 計画立案, 回避的思考, 放棄諦めから構成 4 件法, 4) ストレス対処能力: SOC(Antonovsky, 山崎); 有意味感, 把握可能感, 処理可能感から構成 7 件法, 5) 研修・学会参加発表回数である. 2) の教育ニードは高得点程教育が必要, 卓越性, PISN, 3), 4) は高得点程優れている. 分析方法は自己研鑽以外の教育ニード下位尺度と卓越性の合計点を元にクラスター分析を行い, 教育ニードが高く卓越性が低い臨床能力低群, 両方平均群, 教育ニードが低く卓越性が高い臨床能力高群に分類し, 自己研鑽及びその他の調査内容を従属変数とし一元配置分散分析をした.

【結果】回収は 533 名(回収率 88. 1%), 分析対象は 502 名(平均 34 歳, 平均経験 12. 1 年). 低群 86 名, 両方平均群 254 名, 高群 116 名であった. 有意差のある項目と各群の平均は順に自己研鑽低群 $15. 8 \pm 2. 0$, 中群 $14. 0 \pm 2. 7$, 高群 $11. 3 \pm 3. 3$, PISN 低群 $50. 5 \pm 11. 0$, 中群 $62. 5 \pm 11. 4$, 高群 $73. 6 \pm 11. 3$, カタルシス 低群 $2. 6 \pm 0. 8$, 中群 $2. 8 \pm 0. 7$, 高群 $3. 0 \pm 0. 7$, 計画立案 低群 $2. 5 \pm 0. 6$, 中群 $2. 8 \pm 0. 6$, 高群 $3. 1 \pm 0. 5$, 回避的思考 低群 $2. 0 \pm 0. 6$, 中群 $2. 2 \pm 0. 6$, 高群 $2. 3 \pm 0. 7$, 把握可能感 低群 $22. 3 \pm 4. 5$, 中群 $23. 7 \pm 4. 2$, 高群 $26. 2 \pm 4. 8$ (全て $p < . 01$)であった. 自己研鑽能力として調査した研修会・学会参加発表回数や他の下位尺度に差はなかった.

【考察】臨床能力高群は, 自己研鑽能力に優れ, 接近や回避両方のストレス対処行動を持ち合わせ, 直面する問題全体を把握しつつ先を見通す力を備えていることが明らかとなった. 自己研鑽を積むこと, アイデンティティや柔軟なストレス対処行動を高めることは臨床能力向上に必須であり, その経験を積極的にサポートする組織の在り方や教育プログラムが必要と考える. 本報告は文部科学省 H21 年度助成事業看護職キャリアシステム構築プランの一部である.